

## ■第129回 み言葉に生きる招き 《解説と黙想》

## ●第1朗読 サムエル記上16・1、6～7、10～13

預言者サムエルは、サウルを王（王政制度の開始）にするが、神への不従順（13章、15章）があり、主はサウルを王にしたのを悔やみ（サムエル記上15:35）彼の継続を退けます。この箇所では、神の心にかなう新しい王の基準は、外見より内面の「心」のありように置きます。油の注ぎは、神より王に選ばれた印で、油を入れる「角」に油を満たし、ユダ族の町「ベツレヘム」に行きます。神のご計画は、メシアの系譜に属しており、小さき者のエッサイ（ユダ族の系譜）の息子たちを候補に選びます。神はすでに王になるべき者を見ておられ、長男は容姿も良く立派で、サムエルは油を注がれる者と思っていたが、神は容姿や背の高さに目を向けずに内面を見よ、と言われ、彼を退けます。神の基準は、心・謙虚・誠実などで、七名（歴代誌上2:13-15では全員で七名）は選ばれなかった。父は末の子を軽く見ており、王の候補とは考えず、人の思いで最初から対象外と決めていたが、神の思いはこれと異なり、忍耐・責任・危険が伴う羊の番をしているダビデを見ていました。サムエルはダビデが帰るまで祝宴の食卓には着かない、と言います。ダビデは血色が良く、姿も立派で神を第一にする心があり、兄弟たちの前で彼に油を注ぎますが、即位までには約15年の訓練期間があります。王（メシア）の資格は、能力などではなく、主の霊が継続的に力強く激しくダビデに降り注ぐことで立てられます。【著者の一言】ヨセフはダビデ家の系譜に属し、マリアはダビデ家の血筋を継ぎます。

## ●第2朗読 エフェソへの手紙5・8～14

エフェソの都市では信徒たちが新たな生き方へと招かれます。救われる者の実践的な生き方は、古い人を脱ぎ捨て、愛に生きるように勧めています。パウロは、あなたがたの存在そのものが変えられたので、生き方も変えねばならないと語ります。以前は暗闇でしたが、今は光その者にされたので、救われた者にふさわしい歩みで生きよ、と言います。教会にいるあなたがたは以前、神から離れて罪の暗闇の状態でしたが今は、イエスと一致して主に結ばれ、私たちの存在はもはや「光」となっており、光の子らしく歩みます。神の源である光から生まれる実とは、他者に益をもたらそうとする善意であり、神の基準にかなう正義には偽りのない真実を生じさせます。自己中心にならず、主の基準で判断し、何が主に喜ばれるかを確かめ、吟味しなさい。罪には、一時的な快樂があっても、永遠の価値はなく、実を結ばない暗闇の業には加わず、これに光を照らして明るみに出し、暗闇をはっきりとさせます。光を恐れ、隠れてひそかに行われる罪は、神の似姿に造られた者としては、口にすることも恥ずかしいことです。神の光では隠されずに真実が明確にされ、裁きは明らかになります。罪が暴かれて回心へと導かれ、光となります。罪で鈍くなり、靈的に無関心となって眠りにについている者には、罪が支配する死者の中から立ち上がらせ、イエスの光を浴びて歩みます。【著者の一言】主に光にされてふさわしい実を結びながら、歩む者のターニングポイントを学びました。

## ●福音書朗読 ヨハネ9・1、6～9、13～17、34～38

この箇所では、①当時、障がいなどは罪の結果（因果応報）であるとの考えをイエスは否定し、神の業である救いを語ります。②イエスは世の光として、信仰の目を開かせ、彼の正体を見せます。イエスは盲人に唾で土をこね、土から人を創造された（創世記2:7）のを再現します。神がイエスを遣わし、シロアム（遣わされた者）の池を示し、盲人もここに遣わされます。信仰の従順を求める行為が池に行って洗え、で再創造により癒されます。目の回復と靈的な目覚めが、目が見えるで、社会的に排除された者が物乞いと呼び、救いは弱者に現れます。事実確認のためにファリサイ派のところへ盲人を連れて行きます。彼らは安息日を人より律法を優先させ、絶対視する態度が、安息日を守らない者は神から来た者ではない、と語ります。だが罪人が、奇跡を行えるだろうか、と彼らに疑問が生じます。盲人に信仰告白を迫り、お前はあの人をどう思うのか、との問いに対して、預言者だと言うと、律法学者たちは、罪の中に生まれた者が、我々に教えるのか、との反感を買い、会堂から彼を外に追い出します。そこに権威と栄光を持つ人の子、イエスと出会います。純粋な気持ちでその方を信じたい、と申し出ると、あなたは靈的に、もうその人を見ているとイエスは語り、信仰告白は「主よ、信じます」で完成します。ひざまづくことで礼拝の行為となり、これらの一貫した歩み方が信仰者のモデルとなります。

著者 蒲池 明憲